

令和3年度入学 一般選抜 試験問題の出典

盛岡短大部生活科学科

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	生活デザイン 専攻	岩手日報	震災「定期的に聞 く」半数	岩手日報， 2020年3月6日付よ り	岩手日報社
	食物栄養学 専攻	立川 昭二	習い病となる	『NHKきょうの健 康』218号， 日本放送出版協会， 2006年より pp.158-159	株式会社 NHK出版 (旧社名：日 本放送出版協 会)

短期大学部

小論文 (90分)

学科・専攻名	ページ
生活科学科 生活デザイン専攻	1
生活科学科 食物栄養学専攻	2～3
国際文化学科	4～5

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題並びに解答用紙が異なるので注意ください。
- 3 この問題冊子は5ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督員に知らせください。
- 5 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙(各学科・専攻別)には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入ください。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入ください。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りください。

以下は、岩手日報社と岩手大学が共同で実施した防災教育についての調査の結果を報じた新聞記事である。この文章を読み、あとの問いに答えなさい。

震災「定期的に聞く」半数 「てんでんこ」理解 27 % 県内 50 校 防災教育調査

岩手日報社と岩手大は共同で、県内の小学校、中学校、高校と特別支援学校 50 校の児童生徒と教職員を対象に、防災など学校安全に関するアンケート調査を初めて行った。学校で教職員から東日本大震災の話の定期的に聞いていると答えた児童生徒は 50.1 % で、津波から命を守る教訓として知られる「津波てんでんこ」の言葉を理解しているのは 27.5 % にとどまった。震災から間もなく 9 年で、教訓の伝承が課題となる中、学校と地域一体の取り組みは一層重要性を増していく。

「震災について学校の先生から話を聞くことがあるか」の設問に対し「ほとんど聞いたことがない」と答えた児童生徒は 24.9 %。教職員にも学校で震災について話す頻度を尋ねたが、「ほとんど話さない」は 17.6 % で、児童生徒の受け止めと開きがあった。

「震災で自分が住む地域に何が起きたか知っているか」の回答は「詳しく知っている」「少し知っている」が計 78.8 % を占め、一定の伝承がなされていた。一方、地震などの災害が起きたらどうするか、家族と話し合っていると答えた割合は「1 カ月に 1 度以上」と「1 年に 1 度以上」を合わせ 37.1 % だった。

沿岸部では、被災した子どもたちや保護者への配慮などから「ほとんど話さない」とする教職員の回答が内陸部より高く、教育事務所単位では中部の 7.9 % に対し、宮古 22.9 %、沿岸南部 22.2 % に上った。

学校で震災の話の聞く頻度が低い児童生徒ほど、家庭の防災意識も低い傾向が見られた。数年に 1 度でも学校で震災の話を聞いた児童生徒は「家庭で災害時の対応をほとんど話し合わない」と答えた割合が 25.2 %。これに対し、教職員からほとんど震災の話を聞かないと答えた児童生徒の 46.8 % は、家庭でも災害対策を話し合っていなかった。

震災前に釜石東中で防災教育を実践した文科省総合教育政策局の森本晋也安全教育調査官は「震災の教訓の伝承だけでなく、今後起こりうる災害への備えの低さも表れている可能性もあり、改めて防災意識を高める必要がある」と指摘する。

【調査方法】 2020 年 1、2 月に県教委のいわての復興教育推進校 50 校を対象に実施。48 校の児童生徒(主に小学 5 年、中学 2 年、高校 2 年)2171 人と教職員 790 人から回答を得た。児童生徒の内訳は小学生 451 人、中学生 356 人、高校生(定時制を含む)1329 人、特別支援学校の児童生徒 35 人。教職員(任意回答)は小学校 208 人、中学校 119 人、高校 399 人、特別支援学校 46 人(無回答 18 人)。

(『岩手日報』2020 年 3 月 6 日付「震災「定期的に聞く」半数」より、一部改変)

問 今後学校での防災教育はどうあるべきかについて、自分のこれまでの学校での経験にも触れながら、あなたの考えを 700 字以上 800 字以内で述べなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

京の都大路であろうか。病的に肥満した女が両肩を左右から支えられて苦しげに歩いている。周りの人たちが笑っている。平安末期に作られた絵巻『^{やまいのそうし}病草紙』の1枚(図)。



図 「肥満の女」作者不詳・平安末期(福岡市美術館蔵)

この絵を説明した^{ことばがき}詞書によると、この女は、京の七条あたりに住む高利貸しで、あくどい商法でたちまち金持ちとなり、朝夕美食しているうちにみるみる肥満し、歩行も思うにまかせず、外出には付き添いの女が両肩を貸しても、汗を流し^{あえ}喘ぐさま、「くるしみつきぬものなり」とある。

現代でいえば女性起業家として成功し、食べ過ぎ飲み過ぎ、そして運動不足のため、日常生活にもさしつかえるほど病的に肥満してしまった、といったところか。

(中 略)

現代病といわれる肥満症は、平安時代にもあった。生きるのが精一杯の庶民には肥満者はいなかったが、金銭や飲食への欲にとりつかれ、競争と安逸に陥っていた貴族や富裕者には、こうした生活習慣に起因する病気に侵される者がいた。

肥満だと^{かか}罹りやすい糖尿病も、平安時代にすでにあった。歴史上最大の権力者といわれる藤原道長は、当時「飲水病」といわれた糖尿病が死因であった。

王朝貴族たちは美食多食と過度の飲酒という食生活、乗物(牛車)を使うための運動不足、それに権力競争によるストレスなどが重なり、糖尿病となり、白内障などの合併症に侵され、命を落とした。

最近では、糖尿病・心臓病・脳卒中など生活習慣病といわれるライフスタイルにもとづく病気が大きな社会問題となり、これまでの治療医学に代わって健康医学が注目されるようになった。

日本最初の健康医学原論ともいえる貝原益軒の『^{ようじょうくん}養生訓』には、「病なき時、かねてつゝしめば病なし。病おこりて後、薬を服しても病癒^{いえ}がたく、癒^{いゆ}る事おそし」とあり、さらに「^{およそ}凡よき事あしき事、皆ならひ(習い=習慣)よりおこる。養生のつゝしみ、つとめも^{また}亦しかり」と説かれている。

「つゝしむ」は今日のことばでいえば「用心する」「自制する」こと。用心して良い習慣をつければ病気にならない。自制しないで悪い習慣に慣れてしまうと、絵の女のように「くるしみつきぬ」ことになってしまう。「習い性となる」という諺^{ことわざ}があるが、「習い病となる」のである。

(立川昭二「習い病となる」『NHK きょうの健康』218号，日本放送出版協会，2006年，pp.158-159より，一部改変)

問 1 課題文を 200 字以上 250 字以内で要約しなさい。

問 2 課題文をふまえ，あなたの食生活習慣を取り上げ，その内容と日常的に取り組んでいること，その取り組みによってあなた自身にどのような影響がもたらされたかを 500 字以上 550 字以内で述べなさい。